

で、きっと気に入るものが見つかると思います。興味があれば、ぜひ *Bunnacula and Friends* シリーズを読んでみてください。

Winnie the Witch シリーズ⁷
2010年度経営学部卒業生 村瀬晶子

私はもともと英語に苦手意識がありましたが、英語の絵本のかわいらしい絵柄の表紙に惹かれて手にとったのが Valerie Thomas 著の *Winnie the Witch* という絵本でした。

らくがき風の絵はとてもユニークで、見ているだけで愉快的気持ちにさせてくれました。すべてのページが絵で埋められているので、英語が苦手な私でもその挿絵を頼りにどんどん読み進めることができました。魔法のウィニーのへんてこな魔法とそれに巻き込まれる飼い猫のドタバタ劇が繰り広げられていて、毎回どんな魔法が出てくるのか、何が起こるのか、わくわくさせてくれる絵本です。ウィニー達の魔法の世界や飼い猫との友情など、難しいテーマではなく、楽しく気軽に読めるので、英語が苦手だと感じている人にもおすすめしたいです。シリーズ化されているこの絵本ですが、どの巻もカラフルでユニークな絵、わくわくできる魔法であふれています。一冊読んでみると、きっと次々読んでみたくなると思います。

(以下、本文中に登場した本の挿絵画家、出版社、出版年などを記しておきます)

- 1 Cambridge, MA: Candlewick Press, 2000.
- 2 これはシリーズ物で *Mercy Watson to the Rescue* (illustrated by Chris van Dusen, Cambridge, MA: Candlewick Press, 2005) など数冊が出版されています。
- 3 Illustrated by Timothy Basil Ering, Cambridge, MA: Candlewick Press, 2003.
- 4 Illustrated by Bagram Ibatoulline, Cambridge, MA: Candlewick Press, 2006.
- 5 バグラム・イバトーリーン絵、子安亜弥訳、ポプラ社、2006年
- 6 Illustrated by Jeff Mack, New York: Aladdin, 2005.
- 7 Illustrated by Korky Paul, New York: HarperCollins, 2007. なお、このシリーズで10冊以上が出版されています。

セキレイの心

経営学部
矢田 博士

一、はじめに

愛知県日進市を流れる岩崎川と天白川の土手の上の道を歩いていると、カモやサギ、カワウやシギ、ヨシキリやセキレイ、キジやカワセミなど、様々な野鳥を目にすることができる。

筆者はかつて「岩崎川のカワセミ」(本誌23号、2010年7月、所掲)と題する拙文において、岩崎川でカワセミの姿を目撃したのを機に、カワセミを詠った中国の古典詩歌について紹介した。本稿では、セキレイを詠った詩を取り上げてみたい。

二、セキレイの生態および習性

その前に、セキレイの生態および習性について、中国の古典文献を基に整理しておきたい。まずはその外見的特徴について、三国・呉の陸璣の『毛詩草木鳥獸虫魚疏』巻下「脊令在原」の条に、以下のように言う。

脊令、大如鵓雀、長脚長尾尖喙、背上青灰色、腹下白、頸下黒、如連銭。

[鵓雀は、鵓雀(小鳥の一種)ほどの大きさで、長い足に長い尾、尖った嘴を備え、背中中は青みがかかった灰色で、腹側は白色、首の下は黒色で、銭を連ねたような模様がある。]

セキレイは、体長20cmほどのスズメ目セキレイ科に属する鳥で、川の土手のくぼみや河原の石の間などに巣を作り、トビケラやカワゲラなどの水辺の昆虫を餌とする。たくさんの種類があるなか

で、日本で目にすることができるのは、背中が黒いセグロセキレイと腹側が黄色いキセキレイ、それにハクセキレイの三種とされる。陸璣の言う「脊令」の外見的特徴は、ハクセキレイのそれに最も近いと言えよう。

次にその習性について、『詩経』小雅「常棣」の「脊令在原」句に対する毛伝（前漢の毛亨・毛萇が施した注釈）に、以下のように言う。

脊令、雝渠也。飛則鳴、行則揺。不能自舎耳。
[鶉鴒は、雝渠のことである。飛べば鳴き、歩けば尾羽を揺らす。習性としてそれを止めることができないのである。]

確かに「チ・チーン、チ・チーン」と鳴きながら、そのリズムに合わせて上下に緩やかな波を打つかのように飛んでいく姿や、長い尾羽を上下に振りながら浅瀬や川原を歩く姿をよく見かける。とりわけ尾羽を上下に振るという行為は、セキレイを最も特徴づける習性と言ってよいであろう。ちなみに、筆者の娘は幼児のころ、セキレイを見れば「ちっば・ふるふるどり」と呼んでいた。

三、兄弟の情愛の象徴

中国ではセキレイは、中国最古の詩集である『詩経』の中で早くもその姿を現す。周の王室や諸侯の宴会用または儀式用の歌謡を収めた小雅のうちの、兄弟の親睦をテーマとする「常棣」と題する詩の一節に、以下のように詠われている。

脊令在原 脊令 原に在り
兄弟急難 兄弟 急難あり
每有良朋 良朋有りと毎も
況也永嘆 況ち永く嘆くのみ

《鶉鴒がいつもいるはずの水辺ではなく原野にいて、助けを求めて鳴きながら飛んでいる。兄弟が急な災難に見舞われたならば、良い友人がいたとしても、なかなか兄弟のように助け合うまでには至らず、ただなすすべもなく長く嘆息するだけだ。》

古い詩ゆえに難解であるが、鄭箋（後漢の鄭玄

が施した注釈）を参考に、上記のように解釈してみた。ちなみに、鄭箋には以下のように言う。

雝渠、水鳥。而今在原、失常処。則飛則鳴、求其類天性也。猶兄弟之於急難。当急難之時、雖有善同門來、茲對之長嘆而已。

【雝渠（セキレイ）は、水辺の鳥である。にもかかわらず、いま原野にいるというのは、本来の居場所を失ったことを意味する。飛んでは鳴き、鳴いては飛んで、その仲間を求めるのは天性によるものである。それはまるで急な災難に遭った者が兄弟に救いを求めるようなものである。急な災難に遭った時には、同門のよき友が駆けつけてくれたとしても、ただ心配そうに相対しては長く嘆くばかりである。]

以上、『詩経』小雅「常棣」におけるセキレイは、兄弟の情愛の深さを象徴するものとして詠まれていることが確認されるのである。

四、共に鶉鴒の心あり

ところで、カワセミの場合は、その最も特徴的な習性と言える「水中めがけて急降下し魚を捕まえる捕食行為」が詩にしばしば詠われていた⁽¹⁾ところが、セキレイの場合は、意外にも「長い尾羽を上下に振る」というその最も特徴的な習性を詠った詩は至って少なく、漢代から唐代までの詩の例で言えば、南朝梁の劉孝綽の「校書秘書省対雪詠懷 [書を秘書省に校ぶ^く 雪に対して懐いを詠う]」詩に、以下の例が確認されるのみである。

鶉鴒揺羽至 鶉鴒 羽を揺らして至り
鶉鴒拂翅歸 鶉鴒 翅を拂いて歸る
《鶉鴒が尾羽を揺らしながらやって来て、鶉鴒（カラスの一種）が翼を振り動かして帰っていく。》

では、中国の古典詩歌の中で、セキレイはどのように詠われているのかといえば、明らかに『詩経』の影響力によるものであろう、兄弟の情愛を象徴するものとして詠われている例が圧倒的に多いようである。とりわけ唐代においては、その傾

向が顕著に認められる。

例えば、宋之問の「別之望後独宿藍田山莊 [之望に別れし後、独り藍田の山莊に宿る]」詩では、兄弟の関係にある宋之望との別れを嘆いて、

鵲鴿有旧曲 鵲鴿に旧曲有り
調苦不成歌 調べは苦にして歌を成さず
自歎兄弟少 自ら歎く 兄弟の少くるを
常嗟離別多 常に嗟く 離別の多きを

《古い曲の歌詞に鵲鴿を詠ったものがあるが、調べが辛すぎて歌にならない。兄弟の一人が欠けてしまったことを嘆き、とかく別れの多い人の世の習いをいつも悲しく思うのだ。》

と詠い、王維の「靈雲池送從弟 [靈雲池にて從弟を送る]」詩では、旅立つ從弟を「鵲鴿」になぞらえて、以下のように詠う。

自歎鵲鴿臨水別 自ら歎く 鵲鴿 水に臨みて別れ
不同鴻雁向池来 鴻雁の池に向かいて来たるに同じからざるを
《池にやって来るカリとは異なり、セキレイが池の水に臨んで別れを告げようとしているのが悲しくてならない。》

また、孟浩然の「洗然弟竹亭 [洗然弟の竹亭]」詩では、弟の孟浩然との兄弟の情愛を「鵲鴿の心」と表現して、

俱懷鴻鵠志 俱に鴻鵠の志を懐き
共有鵲鴿心 共に鵲鴿の心有り
《我ら二人は、鴻鵠（大きな水鳥）のような大きな志をともに抱き、鵲鴿のように兄弟の急難を助け合う心をもとに持っているのだ。》

と詠い、杜甫の「得舍弟消息 [舍弟の消息を得たり] 二首」其の二では、遠方にいる弟との再会が困難なさまを、「客人の到来を告げるとされる烏鵲（カササギ）」と「兄弟の情愛の象徴とされる鵲鴿（セキレイ）」とを対にして、以下のように詠う。

浪伝烏鵲喜 浪りに伝う 烏鵲の喜ぶを
深負鵲鴿詩 深く負く 鵲鴿の詩に
《弟は会いに来ることもできないのに、私を喜ばせようと、カササギが嬉しそうに鳴いて客人の到来を知らせることでしょと手紙で伝えてきた。私の方も弟に会いに行くことができず、『詩経』に詠われているセキレイの心に深く背いているのだ。》

さらに、李群玉の「小弟隍南遊近書来 [小弟隍にて南のかた遊び、近ごろ書の来たる]」詩では、手紙とともに寄せてきた弟の詩を「鵲鴿の篇」と表現して、

吟爾鵲鴿篇 爾が鵲鴿の篇を吟じ
中宵慰相憶 中宵 慰みて相い憶う
《セキレイの心を託したおまえの詩を口ずさんでは、夜半にお前のことを懐かしみながら私の寂しい気持ちを慰めている。》

と詠い、趙防の「秋日寄弟 [秋日 弟に寄す]」詩でも、遠方にある弟を「鵲鴿」になぞらえて、以下のように詠っている。

鵲鴿今在遠 鵲鴿 今 遠きに在り
年酒共誰斟 年酒 誰と共に斟まん
《鵲鴿のような心を持ったおまえは、今は遠方にいる。新年を祝う酒は出来たが、いったい誰とともに酌み交わせばよいのだろうか。》

現存する唐代の詩の中で、鵲鴿を詠った詩は、以上の例を含めて全部で三十二例が確認される。そして、そのうちの二十四例までが、実に『詩経』小雅「常棣」を踏まえているのである。

五、おわりに

以上、セキレイは、中国の古典詩歌の中では、『詩経』小雅「常棣」に初めて詠われて以来、もっぱら兄弟の情愛を象徴するものとして詠われていることが確認できた。また、逆に「長い尾羽を上下に振る」というセキレイを最も特徴づける習性については、意外にも詩人たちの関心を惹きつけ

るものではなかったことが確認できた。

ところで日本では、セキレイは古くは『日本書紀』に登場する。その巻一「神代・上」に、以下のように言う。

遂将交合而不知其術。時有鵲鴝、飛来揺其首尾。二神見而学之、即得交道。

[遂に將に交合せんとするも、其の術を知らず。時に鵲鴝有り、飛来して其の首尾を揺らす。二神見て之れに学び、即ち交道を得たり。]

「二神」とは、イザナギとイザナミの二人の神のこと。交合しようとしたものの、やり方が分からなかった二人の神は、まさしくセキレイの「長い尾羽を上下に振る」という習性を手がかりに、その方法を知り得たと言うのである。⁽²⁾ かくして、二人の神は次々と洲を生み、今日の日本の国土を作りあげるのである。我々が今こうして日本という国に住んでいられるのも、その意味ではセキレイのお陰だとも言えるのである。

【注】

- (1) 拙文「岩崎川のカワセミ」(本誌23号、2010年7月)を参照。
- (2) 『日本書紀』の「鵲鴝」は、「二ハクナブリ」と訓むとのことで、『日本書紀 上』(坂本太郎ほか校注、岩波書店、日本古典文学大系、一九六五年)の注には、「二ハは俄(には)かの語幹。クナは、尻の意。フリは、振る意。速く尾を振り動かす鳥の意。」とある。このようにセキレイは、日本ではやはり、その「長い尾羽を上下に振る」という習性の方に、より関心が寄せられたようで、「庭叩き」「石叩き」「岩叩き」とも呼ばれる。また、イザナギとイザナミの二人の神に交合の方法を教えたことから、「教え鳥」「恋教え鳥」「嫁ぎ教え鳥」などとも呼ばれる。

藤原定家の『拾遺愚草』上「十題百首・鳥」に、セキレイを詠った和歌が収められており、以下のように言う。「さらぬだに / しもがれはつる / くさのはを / まづうちはらふ / にはたたきかな」(そうでなくても、すっかり霜

枯れてしまった草の葉を、「庭叩き」の異名の通り、空から舞い降りるや、真っ先に尾羽でうち払うセキレイであることよ)。

また、セキレイは一年を通して見られる鳥であるが、「古来よりその姿態のすずやかさと水辺に多く見られることから」、俳句では秋の季語に分類されるようである(『新日本大歳時記 秋』講談社、一九九九年、「鵲鴝」の項、今井聖担当)。



岡元鳳纂輯『毛詩品物図攷』より